

中間年齢層の労働問題

『日本労働研究雑誌』編集委員会

本特集では、働く人の年齢に着目し、若年層と高齢層の間にはさまれた年齢層を「中間年齢層」と位置付ける。およそ30歳台半ばから40歳台くらいまでがその中心である。こうした年齢層に特徴的な労働問題について考えることをテーマとしたい。近年の労働政策に関する議論は、若年層や高齢層に焦点が当てられる傾向にあった。中間年齢層は、これらの年齢層が取り上げられる際、比較の準拠として想定されながら、年齢層としての理解に向けた試みは、むしろ相対的に手薄であったと思われる。しかし、中間年齢層は、職場における中堅人材として、あるいは育児・介護の担い手として、重要な役割を担うことの多い年齢層でもある。職業キャリアでは中期に差し掛かっている。働き方やキャリアに関して、この年齢層に特徴的な課題があるはずである。労働市場の変化に伴う今日的な課題もあろう。そうした課題の広がりについて、多角的な視点から考えることにしたい。

上野・神林論文「労働市場での中間の年齢層の変化」は、35～50歳までの中間年齢層のフルタイム労働者に焦点を当て、バブル崩壊以降20年間の労働市場の変化を検証する。この間、転職の機会費用はより小さくなり労働市場の流動化が中間年齢層にも及ぶとともに、内部労働市場において管理職の際の昇進競争が強まった可能性がある。論文では、『賃金構造基本統計調査』と『雇用動向調査』の個票を接合した事業所パネルデータセットをもとに管理職昇進の報奨と異動率との関係を実証的に検討し、課長・部長への報奨ともに概ね正の相関があることを明らかにしている。こうした変化はランク・オーダー・トーナメント(Rank-order-tournament)理論と整合的であり、日本の雇用慣行のコアと考えられてきた中間年齢層においても、労働市場の変化と昇進構造とが無関係でないことを確認している。ただし、分析から、部長昇進においては、外部採用者とは異なる生え抜き間の競争が依然として主である可能性がある。中間年齢層のなかでも昇進ス

テージや年齢により経験している労働市場の変化は多様であることが示唆され、単純なモデルのみで全体を整合的に説明することが難しいことを指摘している。

中間年齢層の労働市場に関し、中村論文「企業の中老年採用に関する実証分析」では、企業による中老年採用の実態について理論的分析を試みている。中老年の労働移動の円滑化が重要な政策課題となっているものの、企業の採用行動に関する既存研究の多くは調査報告や実態把握に留まり、研究が不十分とする。論文は、企業アンケート調査データに基づき、中老年層(40～65歳)の採用に関して、日本型雇用システムにおける人事諸制度と採用の間の制度的補完性及び企業の採用行動の経路依存性について分析する。その際、賃金カーブの形状変化に着目して中老年層を前半の「賃金上昇期」と後半の「賃金調整期」に分ける。分析によると、企業における「賃金調整期」層の採用実績は「賃金上昇期」層の採用実績から強い影響を受けるなど、中老年の採用には世代間の経路依存性がある。これから、より若い年代の採用拡大が、中老年の採用拡大につながるとの含意を指摘する。一方、制度的補完性に関しては統計的に有意な関係が確認されないことから、雇用システムより下位の人材マネジメントシステムに着目した検証が必要としている。

労働市場の変化は、中間年齢層のキャリアのあり方にも影響を与えるはずである。鈴木論文「組織内キャリア発達における中期のキャリア課題」は、30歳台半ばから40歳台にかけての年代を中期キャリアと位置づけ、この時期における組織内キャリアの課題について検討している。中期キャリアは、組織に対する責任(組織を背負う意識)が醸成されるべき時期にあたり、組織と個人の間でキャリア発達をどう考えるかを検討する意義は大きいとする。論文では、組織ではなく個人が自らのキャリアに責任を持つことを主張するニューキャリア論の展開を整理したうえで、組織内キャリアについて、組織と個人のそれぞれの意図の相

相互作用という観点を示す。中期キャリアにおけるキャリアの停滞と組織内での責任回避は、ニューキャリア論へのキャリア観の転換の過程で、キャリアに対する責任についての組織と個人の間の認識のちがいが引き起こされている可能性がある。これを踏まえ、中期キャリアの課題として、自身のキャリアに対する責任の所在および自身の組織内での役割を認識することにあるとする。さらに、キャリア論における課題として、特定の組織でキャリアを歩みつつ自身でキャリアをマネジメントする人々についての理論的検討をあげている。

中間年齢層の人たちは、企業組織内でどのような役割を期待され、役割遂行上どのような課題に直面しているのか。戎野・小熊・村杉論文「職場における中堅層の現状と課題——労使関係の視点から」は、職場の年齢構成との関係から、職場の中堅層（35～49歳）の働き方の実態とそれに伴う課題を明らかにしている。企業別労働組合等へのアンケート調査およびインタビュー調査に基づく分析からは、中堅層が多忙であることで、他の世代とのコミュニケーションが不十分となり、次世代育成に手が回らない状況を指摘する。そのうえで、中堅層の過不足状況により職場を類型化し、職場の年齢構成との関係を検討することで、若年層や高齢層の不足によっても中堅層の業務過剰が生じていることを確認している。このような実態は、中堅層の業務遂行上の問題だけでなく、職場や企業における技能継承や人材育成の問題を引き起こしているとする。対策事例として60歳以上の高齢者による中堅層へのサポートを紹介するほか、根本的には、コンスタントな新卒採用を通じた適正な年齢構成の維持が重要であるとし、この点に関する労使の課題共有と取り組みに期待をかけている。

中間年齢層は、介護や育児が集中する年齢層でもある。特に昨今では、高齢化の進展に伴い、介護と仕事との両立が性別を問わず多くの人を抱えるワークとライフのコンフリクト問題となりつつある。このような認識を踏まえ、黒田論文「中間の年齢層の働き方——労働時間と介護時間の動向を中心に」では、『社会生活基本調査』の個票データを用い、中間年齢層（30～50歳台）で正社員として働く人で介護や育児を担う人を対象に、労働時間や生活時間配分の長期的推移

を観察している。観察から、中間年齢層で、正社員として就業しながら介護を行う人の数自体は急増する一方、それらの人々の介護時間は、介護場所や他人の助けの有無に関わらずこの10年で低下している。他方で、男女とも中間年齢層の正社員の労働時間は増加傾向にあり、特にこの15年間では家族の介護を担う人々の労働時間が顕著に増加しているとする。介護時間の低下要因については、介護保険の導入による社会的な支援が機能してきている可能性も一部で認められるものの、この10年間の大幅な介護時間の低下を十分には説明できない。介護保険制度見直しの観点からも追加的な分析が必要としている。

島津論文「ワーク・ライフ・バランスとメンタルヘルス——共働き夫婦に焦点を当てて」では、中間年齢層の働き方について、特にワーク・ライフ・バランスに焦点を当て、職業性ストレス研究におけるワーク・ライフ・バランスの考え方や、ワーク・ライフ・バランスがメンタルヘルスに与える影響について論じている。論文では、職業性ストレス研究におけるスピルオーバーとクロスオーバーの概念について紹介する。前者は、仕事と家庭などでの一方の役割における状況や経験が他方の役割における状況や経験にも影響を及ぼすこと、後者は、夫婦間などで、ある個人の感情や態度が別の人に「伝播する」現象に関わる概念とされる。そのうえでこれら概念に着目しつつ、ワーク・ライフ・バランスが健康、特にメンタルヘルスに及ぼす影響について、未就学児を持つ共働き夫婦を対象とした著者らによる日本での実証研究を中心に紹介している。ワーク・ライフ・バランスと健康に関する今後の研究に関し、少子高齢化・核家族化が急速に進み、育児や介護の問題が重要になっている日本でこそ、ワーク・ライフ・バランスと健康についての知見を蓄積し、各国に向けて積極的に発信する必要があると主張する。

以上からも、中間年齢層は、キャリアや働き方に関して実に様々な課題に直面していることが分かる。これらの課題に関連して、法的にはどのような対応がみられるだろうか。菅野論文「中間の年齢層に関する法的課題の検討——家庭生活と労働生活の間におかれた労働者の直面する問題に労働法はどう対処しているか」では、中間年齢層（30歳台半ばから40歳台）にあたる労働者が直面する問題を、休業と賃金に関する

問題、配置転換に関する問題、昇進・昇格に関する問題、非正規雇用労働者問題の4つに分け、主に判例法理の視点から検討している。中間年齢層の労働者は、家庭生活の変化するニーズに対処しつつ労働生活を送るうえで、長期の休業取得や復職後に起きる問題に直面しやすいとし、復職後の賃金減額や配転、昇進・昇格における差別的取扱い等に関する判例を検討している。また、正規雇用か非正規雇用かで二極化している世代であるとの認識から、非正規雇用労働者の問題を取り上げる。このほか、論文では扱わないものの、中間年齢層は、管理職としてのストレスや家庭生活のストレスが過重になる年齢にあたることから、メンタルヘルスに関わる問題も見遇うことができないとする。

以上、特集では、中間年齢層に焦点を当て、働き方やキャリアに関する実態と課題について検討した。論考からは、少子高齢化がすすみ労働市場が変化するなかで、組織内でのキャリア形成や職場における役割遂行、仕事と介護・育児との両立に関し、今日的な課題

に直面する中間年齢層の人々の姿が読みとれる。変化の中にある中間年齢層について、実証的・理論的な研究に基づく議論の必要性が示唆されよう。また、若年期と高齢期をつなぐ職業生活の通過点としてや、次世代への技能継承の担い手として、他の年齢層との関係から中間年齢層をとらえる視点の重要性にも気づかされた。もちろん、就業形態や家族形成のあり方の多様化を背景に、中間年齢層の経験は多様なはずである。それに応じて、各人が直面する課題も異なろう。正社員以外の人たちのキャリアや働き方など、本特集で十分に扱えなかった論点も多い。また、論文はそれぞれの研究領域に関し、今後に残された研究上の課題についても言及している。今回の特集が、中間年齢層の人々が直面する問題の広がりに関心を向ける契機となることを期待したい。

責任編集 佐野嘉秀・竹内（奥野）寿
（解題執筆 佐野嘉秀）